

本論文では、岡倉覚三の生涯の活動に通底する思想をいかに見出すか、岡倉の活動を同時代の日本とアメリカの社会的・文化的文脈に置いてどのように位置づけるか、現在流通している岡倉像をいかに再検証するか、という3つの課題を念頭に、ボストンにおける彼の営為とその方法論を追究する。岡倉の人的ネットワーク構築を重視しながら、ボストン美術館中国日本美術部の経営、未発表作品の執筆、という2つの活動を中心に論じることによって、課題の追究を試みる。

序章では、欧米美術視察旅行と、帰国後に唱えた「自然発達論」の変容と継続について検討し、西欧における経験とそこで形成された理念が、帰国後の活動方針を決定づけ、晩年のボストンにおける活動に影響を及ぼした可能性を考察する。第1章では、世紀転換期の米国の歴史的状況と、岡倉の人的ネットワークの基盤形成と発展過程について考察し、彼の諸活動をボストンの社会的・文化的文脈のなかで捉え直す。第2章では、ボストン美術館中国日本美術部経営の意義について、岡倉とボストン側と2つの視点から検討する。当時のボストンの美術状況や岡倉の経営理念を確認し、人的資源調達や美術館教育などの諸事業を跡づけながら、岡倉が中国日本美術部を東洋美術発信装置として構築していった過程を明らかにする。第3章では、従来、地域社会と分断されて論じられてきた岡倉のオペラ台本『白狐』執筆について、ボストンの音楽状況との関連性からその成立事情の検討を試みる。第4章では、狐、母性と観音、歌舞伎とヴァーグナーのオペラという多角的な視点から『白狐』の作品論を試みる。第5章では、岡倉の活動や思想がボストンでいかに受容され、表象されたかについて検討する。最後に、日米それぞれの岡倉追悼式を通して、同時代の日米における岡倉表象を比較し、その共通性や差異を考察する。

岡倉は生涯をかけて、西洋美術と東洋美術とを結合して新しい美術を創るという理想の実現に取り組み、芸術への共感を通して理解しあうことができるという考えのもと、アメリカにおいて東洋文化を発信する活動を行った。その実行を可能にしたのは、岡倉とボストン社会を結ぶ人的ネットワークであった。岡倉のボストン時代は、このような彼の芸術活動が、ネットワークの拡大と環境の変化に伴って多様化し、発展していった時期と位置づけられる。また日本における岡倉像は、ボストンで表象されたそれとは明確なコントラストを見せており、その固定化は岡倉逝去直後に既に始まっている。ここから現在の岡倉研究の孕む問題や今後の課題を浮き彫りにする。